

創造のパラドックス



k09086 藤代 江里香

—工業都市の秘境—

Keywords

秘境 気付き 埋立地 アノニマス
環境装置 無人島 境界線 昇華

1. 序章

工業生産の為だけに生まれた無人島、城南島。その土台下にはかつて生きた海があり、数々の命が育まれていた。無人島は静かに半世紀の間、日本の発展を見守り続けてきた。

しかし、永続的繁栄は遂げられず、工業地帯の最南端に再び自然が創られようとした。その人工物は20年の時を経て、自然との境界地点へ到達しようとしている。打ち寄せる波、そよぐ潮風、めぐる季節の軌跡はこれからもずっと、存在していく。

2. 計画背景

工業地帯や羽田空港として知られる大田区は、それに伴う廃棄物・騒音などの側面も請け負っている。

高度経済成長を支えた重工業の工場地帯を建設する為、漁業権を破棄し巨大な埋立地がつけられた。その後、市街地の住宅と工場の混在化による騒音、振動などの公害防止対策のために、工場の移転先や産業廃棄物処理施設団地としての場も生まれた。そして、昭和後期には東京湾に巨大なゴミ最終処理場が埋立てられる。工業が最盛期の時代、人間にとって都合のわるいものが寄せ集められ、全てを受け止めた場所であった。

しかし重工業は衰退し、京浜工業地帯にかつての勢いはなく、同地区の中小の工場の数は減っている。

そして今日、工業地域は次のフェーズへ転換し始めた。半世紀以上に海をゴミで埋め立てた場所に自然を創り出す試みがなされている。

一世紀も経たないうちに、破壊と蘇生が行われようとしているこの地は、これからの私達の生き方を再構築すると共に、新たな時間を刻んでいく礎石となるべき場である。全てが人工物である土地は打ち寄せる波で削れ、いくつもの季節を経て、様々な生物の命が創造されてきた。

都市の発展による副産物である不要な物を「捨てる場」である無人島に、「創造する場」を提案する。

3. 敷地

東京湾の埋立地の中で内側へ突き出ている無人島、城南島に焦点を絞り、島の南東に位置する海浜公園を敷地に選定する。

城南島は、昭和後期の公害防止策の為に約70年前に計画され、約30年前に全地区の埋め立てが完了した。

周辺には、人間にとって有害である産業廃棄物処理場が建造されている。また保健所に送られた動物の処分場があり、物だけでなく都市の中で不必要になった命さえも処分している。



写真1. 敷地周辺航空写真-1

城南島の南東に位置する海浜公園は、約20年の時を経て、人工浜や人工岩場が少しずつ自然に溶けていっており、波の音、潮のにおい、海の風は多くの生物を再生してきた。

今春、若洲からゴミ最終処理場へつづく東京ゲートブリッジが竣工し、城南島へのアクセスが容易になった。現在では空港や港が集中していることから、流通経路としても重要な場所になっている。

当敷地から南700メートル先には羽田空港があり、空路が真上を通る。北東690メートル先には貨物船の航路が引かれ、巨大なコンテナを運ぶ船が日に何槽も通る。北に5キロ先には東京湾の輝く夜景が広がり、南西1キロ先には昼夜問わず活動する工場がひしめいている。

城南島は内陸から距離がある上、たどり着くまでには長い工業地帯を通らなければならない。東京ゲートブリッジができる以前は、大田区以外からのアクセスは困難

であった。鉄道は通っておらず、10トントラックやダン
プカーが走り、コンテナが積んである無機質な灰色の工
場群の先、島の端に位置している。そのような島の最南
端に位置する海浜公園は、一種の秘境といえる。

4. 設計趣旨

都市の発展の副産物である人的に有害な廃棄物や、動
物の命さえも捨てられる殺処分場は都市の機能として確
立し、見えないところで私達の生活を支えている。

それらに背を向けず、対を成す「生み出す場」として、
浜辺のアトリエを計画する。訪れる者に環境の些細な変
化への気づきを与え、より豊かに感受できる環境装置で
ある。

見たもの、聞いたもの、感じたものを表現することは、
誰にでも可能なことである。物をつくることは、自分と
の会話をしようとすることであり、ときには声にならない
叫びや、言葉にできない感情を伴う。

地盤をはじめとしてすべてが人工である島は、自然の
息吹きを吹き返したことで、工業都市の中心に位置する
秘境となる可能性がある。

島の風土を建築によって新たに作り出し、東京湾に浮
かぶ自然の風景として、都市に息づかせる。

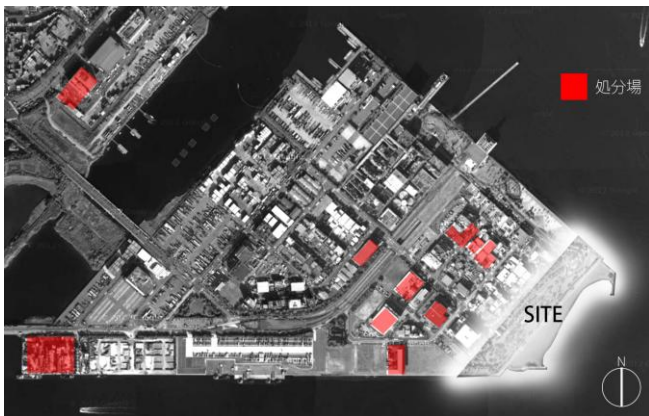


写真2. 敷地周辺航空写真-2

5. 設計手法

様々な環境を配置し、統合することで、長辺500mとい
う巨大な敷地に全体性を持たせ、生まれる風土を知覚さ
せる。

5-1. プログラム

「集団工房」「個人工房」「展示室」「宿泊施設」を
配置し、ランドスケープとして再構築する。

5-2. 手がかり

振れあい

浜辺の境界線は、絶え間ない波によって変数となっ
ている。その有効線上に建築を置くことによって新しい境
界を描く。動と静の揺らぎ幅を知覚する装置とする。

そとに触れる

東京湾、飛行機が飛ぶ空、光る水面を空間の内から知
覚する。内から外をのぞくことで陰影が視界に現れたり、
水面の光が建築の内部で反射し揺らぐ。

目をつむっても、身体に触れてくる潮風や波の音や香
りを知覚させる。

みち

埋立てられた単純な坂道に、おうとつによる回遊性を
生ませる。曲がりくねったみち、ななめに地面に突き刺
さるみち、水辺に向かうみち。明るかったり暗かったり
する。線が道になり、みちくさが生まれる。

潮汐

唯一、ほとんど動きのない水面である浅い汐だまりの
中では、小さい生き物がうごめく様子がうかがえる。雨
季には溢れ、乾季には干上がり、流れる時間に応答する。

5-3. ランドスケープ

浜辺、デッキ、岩場を各方位に広げることで、動線の
幅が広がる。東側にうねりみち、西側には斜面の直線み
ちをつくり、浜辺までのシークエンスのちがいを感じら
れるようにする。

5-4. インターフェース

ボリュームを円形にすることで、すべての面に正面性
を持たせる。創造することと、捨てることは表裏一体で
ある。広がる水平線が表で、処分場を含めた工場地帯が
裏になっている状況を見直す。

5-5. 空間を抜く

水平線、垂直線及び斜めの線で空間を抜くことで、建
築の中に存在する光や陰、風や音をより豊かに捉えられ
るようにする。太陽が動くことで陰が動き、光を追う様
に植物や動物は生活する。

四季によって温度や湿度だけでなく太陽高度も異なる
ため、床や壁に描かれる陰は多様である。

ヴォイドの操作によって、波や風、木々のざわめきの
音を拾い上げ、響かせたりミュートをかけたりする。

6. おわりに

近代の合理主義で徐々に薄らいできた、アノニマスな
制作プロセスを直接見たり、感じたり、実際に行う。現
代社会が忘れてしまいがちな「時間」の概念を持たせ、
生活と季節の循環の穏やかさを体験する。

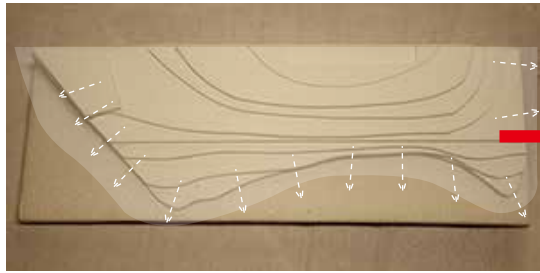
参考文献

- 1) 「建築のちから」 内藤廣著
- 2) 「集落の教え」 原広司著
- 3) 「東北のテマヒマ 【衣・食・住】」 21_21 DESIGN SIGHT著
- 4) 「Alchemy of the Everyday」 Rudolf Steiner著
- 5) 「空間に恋して」 象設計集団著

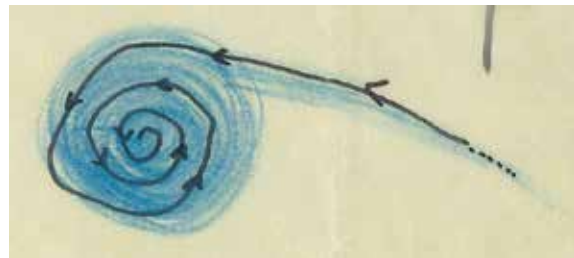
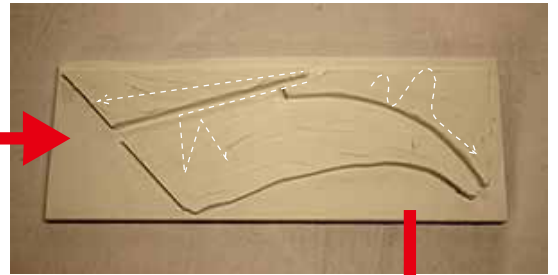
1 ランドスケープ

現状は工場地帯を裏にして
 海の水平線が表になっている。
 浜辺までの道を直線にせず、
 建築の配置やシークエンスを考慮し
 ランドスケープを設計していく。
 潮汐によって海岸線は変化する。
 その変数上に建築を配置するべく
 一番浜が広い南西側に計画する。

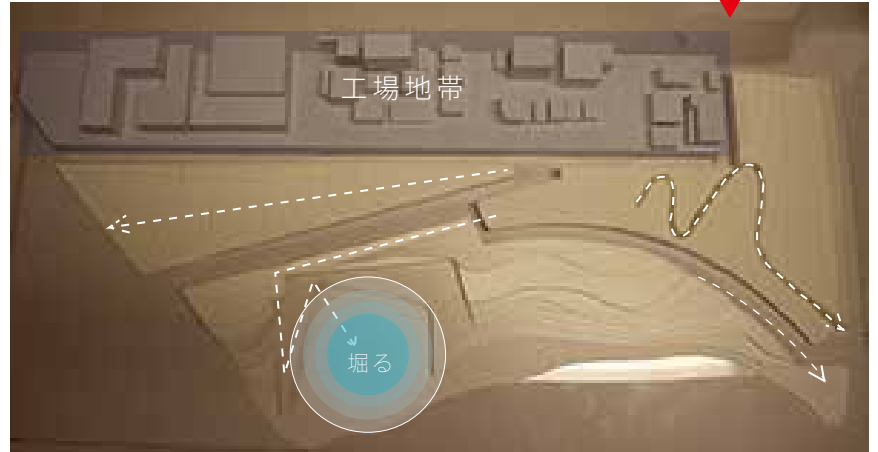
【現状】 視線が面になっている



【計画】 3つのみちをつくり、方向性をつくる



浅い堀に収束するイメージ



2 ダイアグラム

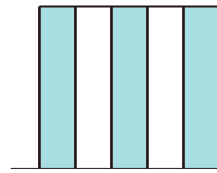
ボリューム



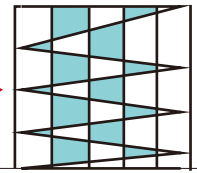
入り口が決まり表が決まる



表裏がない

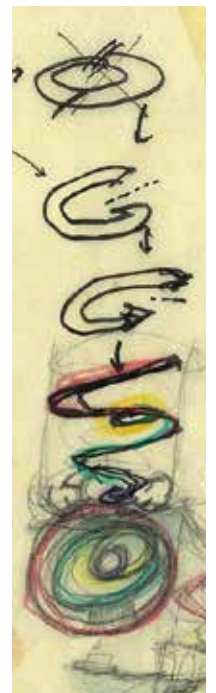
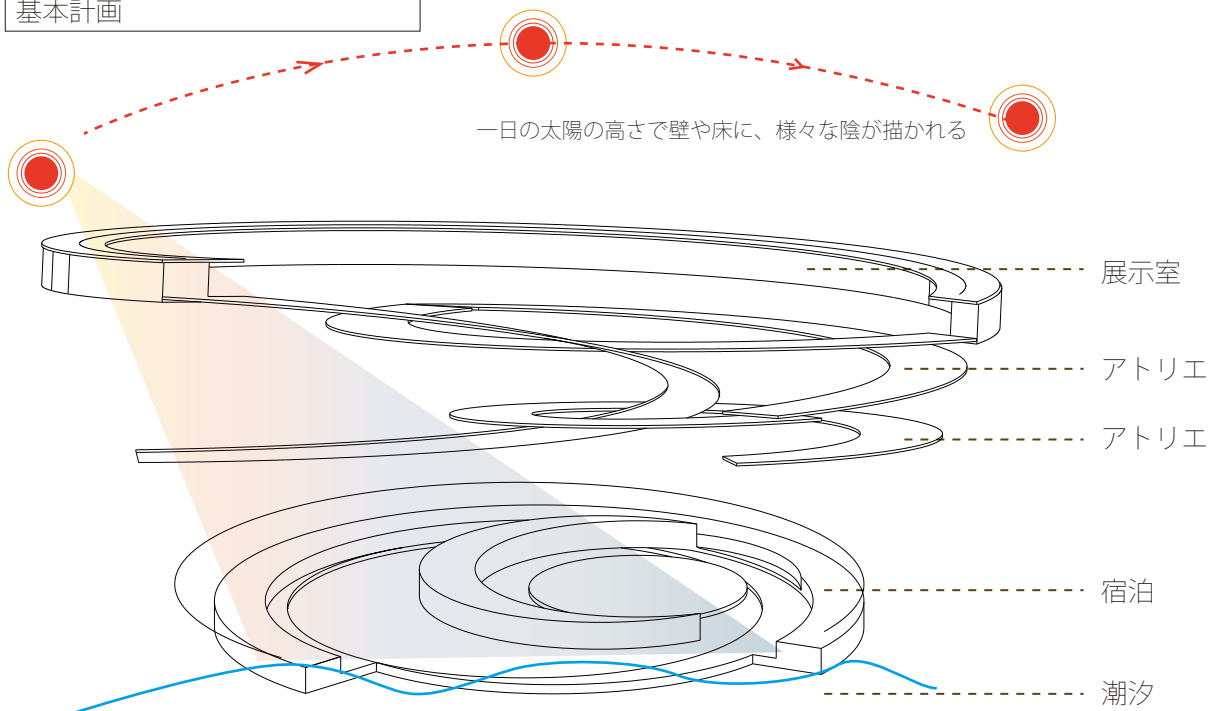


上下に通るヴォイド



らせんを通すと内外の境界がより多く分断される

基本計画



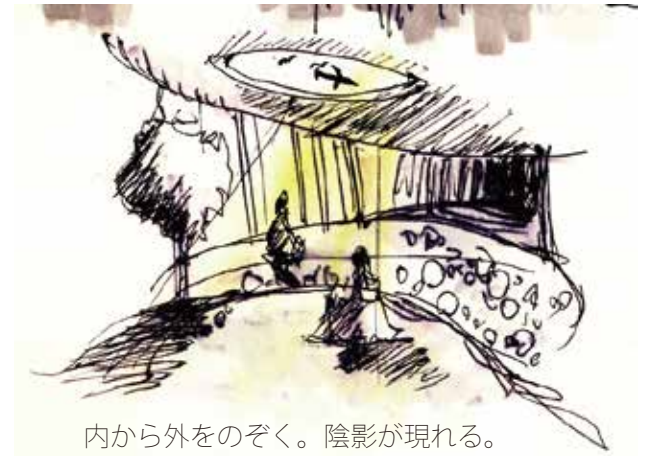
3 骨のスタディー 建築内にみちをつくる



4 パース



潮汐によって建築空間が変化する。



内から外をのぞく。陰影が現れる。



線が道になり、みちくさが生まれる。